

後期高齢者の心身の特性について

※ 社会保障審議会「後期高齢者医療の在り方に関する特別部会」資料から抜粋

【健康保険法等の一部を改正する法律案及び良質な医療を提供する体制の確立を図るための医療法等の一部を改正する法律案に対する附帯決議】（平成18年6月13日参議院厚生労働委員会）抄

三 後期高齢者医療の新たな診療報酬体系については、必要かつ適切な医療の確保を前提とし、その上でその心身の特性等にふさわしい診療報酬とするため、基本的な考え方を平成18年度中を目途に取りまとめ、国民的な議論に供した上で策定すること。

○ 後期高齢者の心身の特性について

(H19.3.29 特別部会資料抜粋)

後期高齢者医療の診療報酬については、後期高齢者に特有の心身の特性等を踏まえ、これにふさわしい医療を提供するためにはどのような仕組みが適当か、という視点に基づいて考える必要がある。

後期高齢者の心身の特性については、次のような指摘がされている。

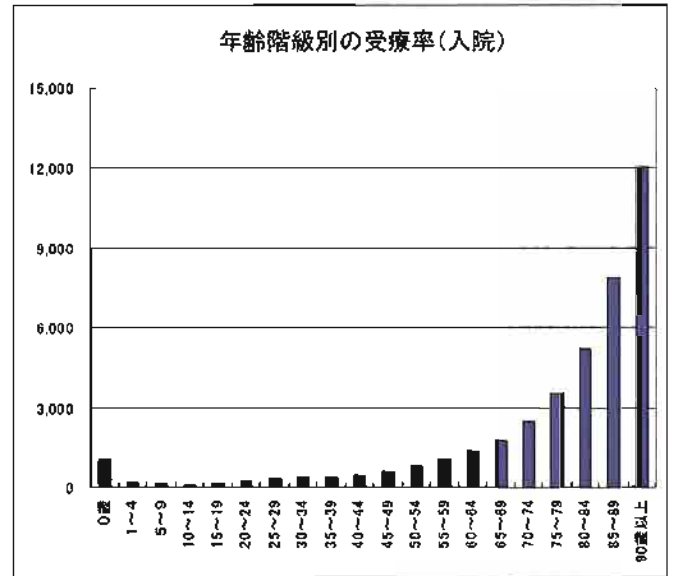
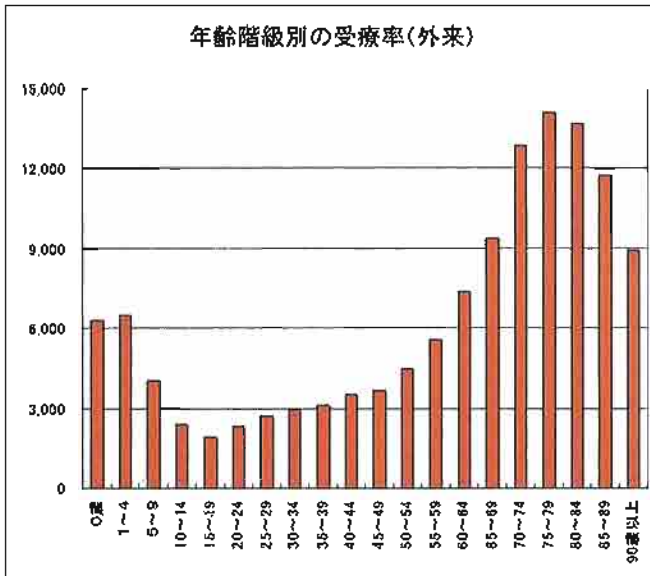
- (1) 老化に伴う生理的機能の低下により、治療の長期化、複数疾患への罹患（特に慢性疾患）が見られる。
- (2) 多くの高齢者に、症状の軽重は別として、認知症の問題が見られる。
- (3) 新制度の被保険者である後期高齢者は、この制度の中で、いずれ避けることができない死を迎えることとなる。

平成19年10月10日に公表された「後期高齢者医療の診療報酬体系の骨子」にも同文の記載あり

※ 以下は、H19.6.18 特別部会資料からの抜粋

高齢者の心身の特性（疾病特性等）（1）

疾病全体で見ると、入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向にあり、また、外来は壮年期から加齢に伴い増加する傾向にある。

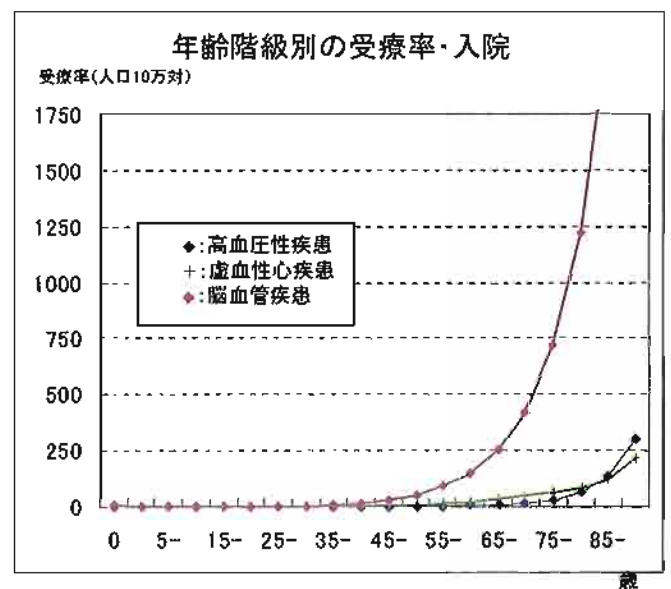
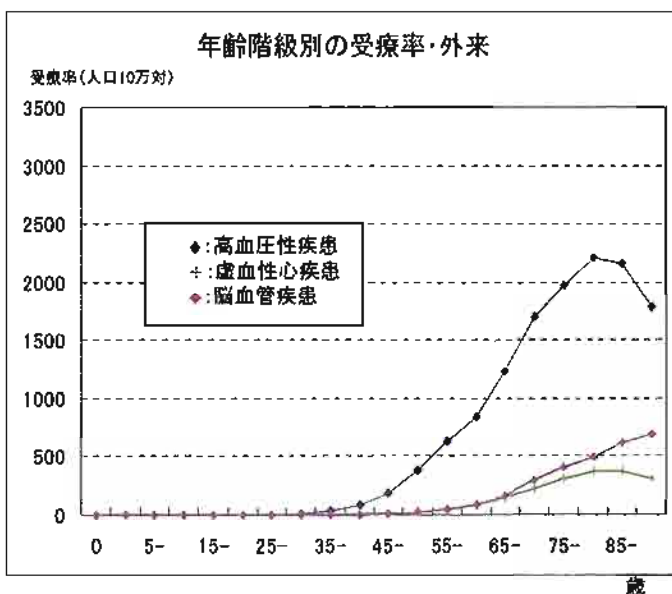


出典) 患者調査 (平成17年)

12

高齢者の心身の特性（疾病特性等）（2）

疾病の中でも、高血圧性疾患、虚血性心疾患、脳血管疾患については、外来において壮年期から加齢に伴い増加し、入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向が顕著に現れる。

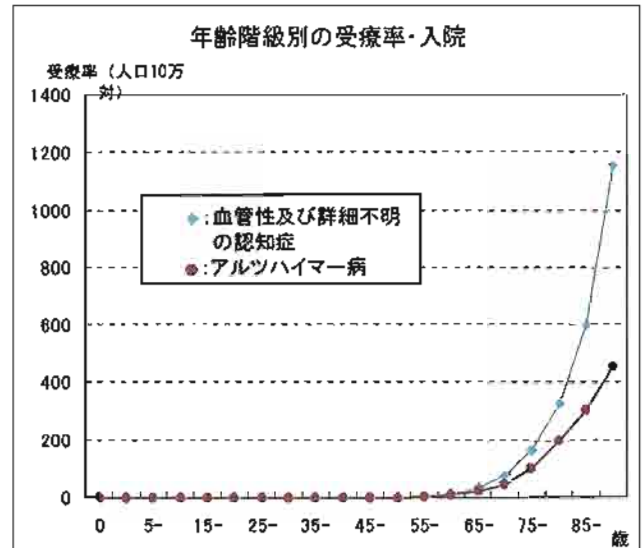
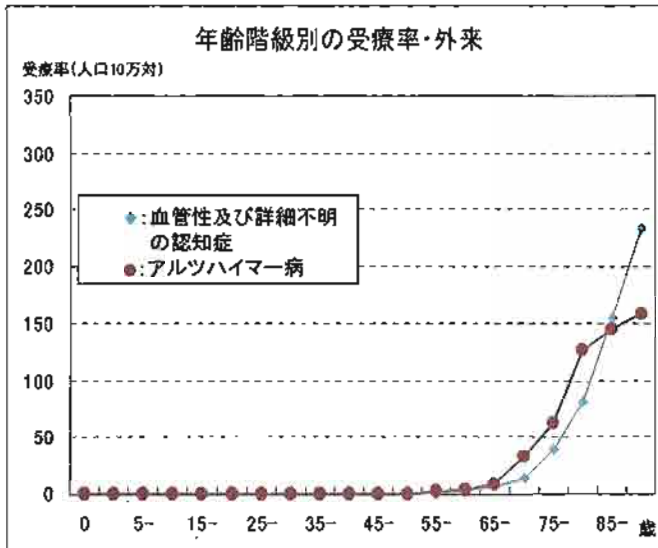


出典) 患者調査 (平成17年)

13

高齢者の心身の特性（疾病特性等）（3）

認知症については、外来においては、65歳から受療率が上昇し、75歳以上でさらに上昇が認められる。血管性の認知症は、70歳以上とやや遅れて受療率の上昇が認められる。入院受療率は後期高齢期になって増加する傾向が顕著に現れる。

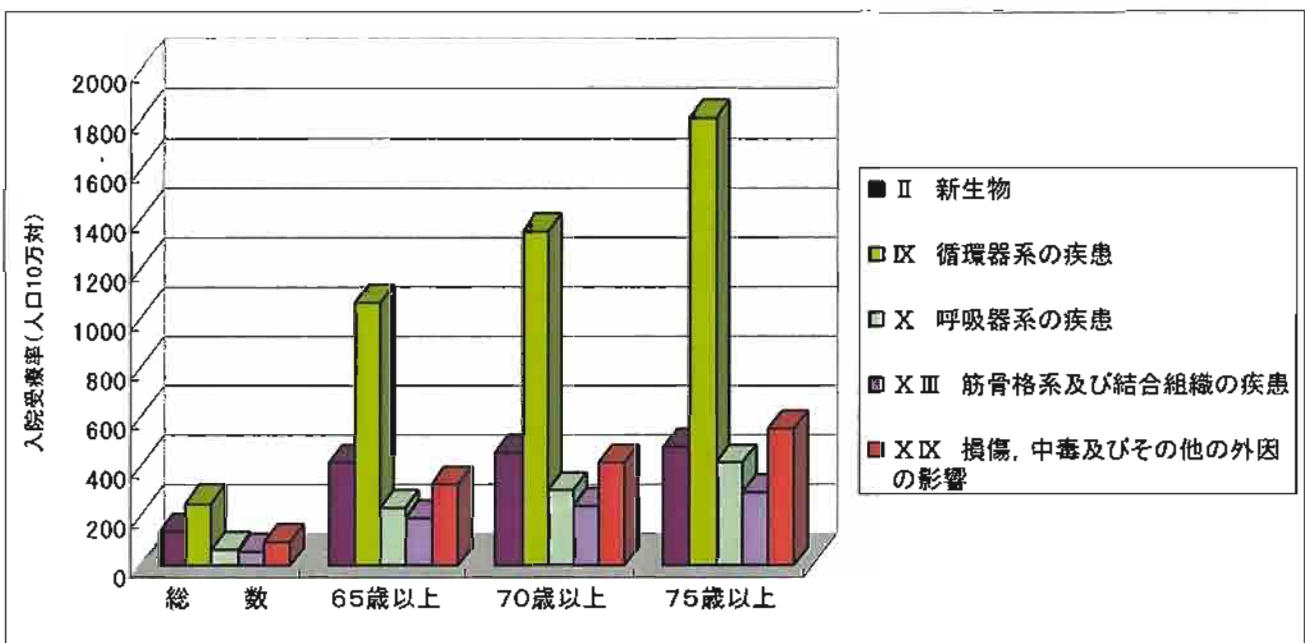


出典) 患者調査(平成17年)

14

傷病分類別入院受療率(人口10万対)

・75歳以上の高齢者では循環器系の疾患において特に入院受療率が増加する。

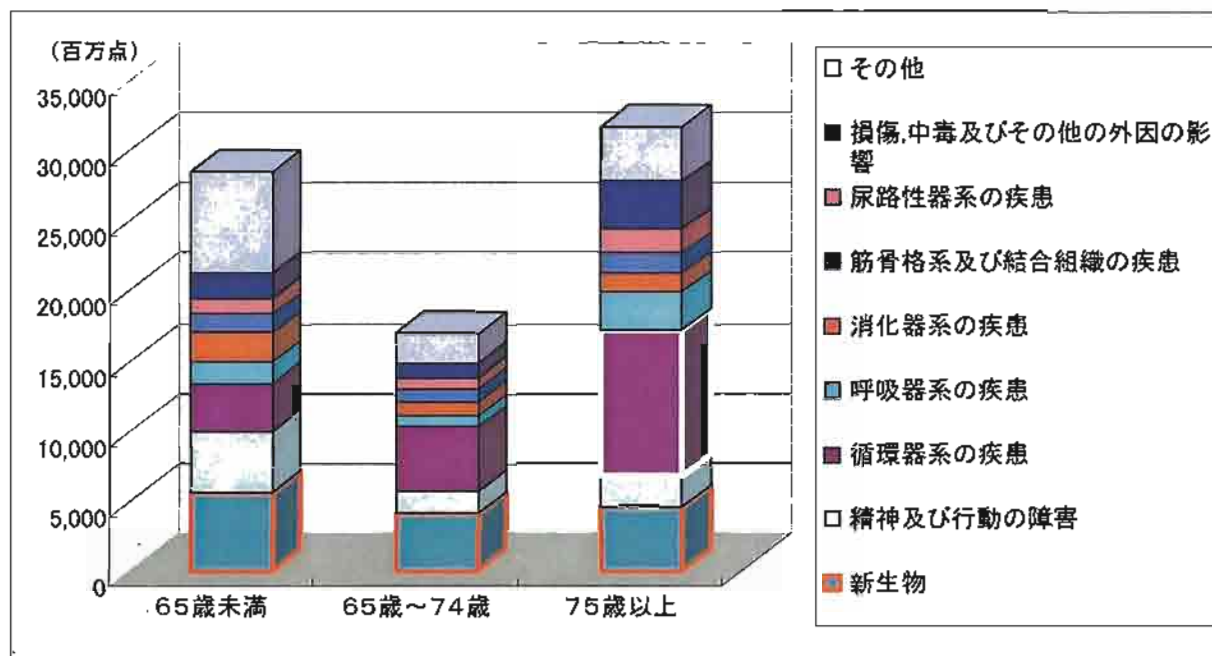


出典) 患者調査(平成17年)

18

年齢階級別・疾患分類別にみた医療費（入院）

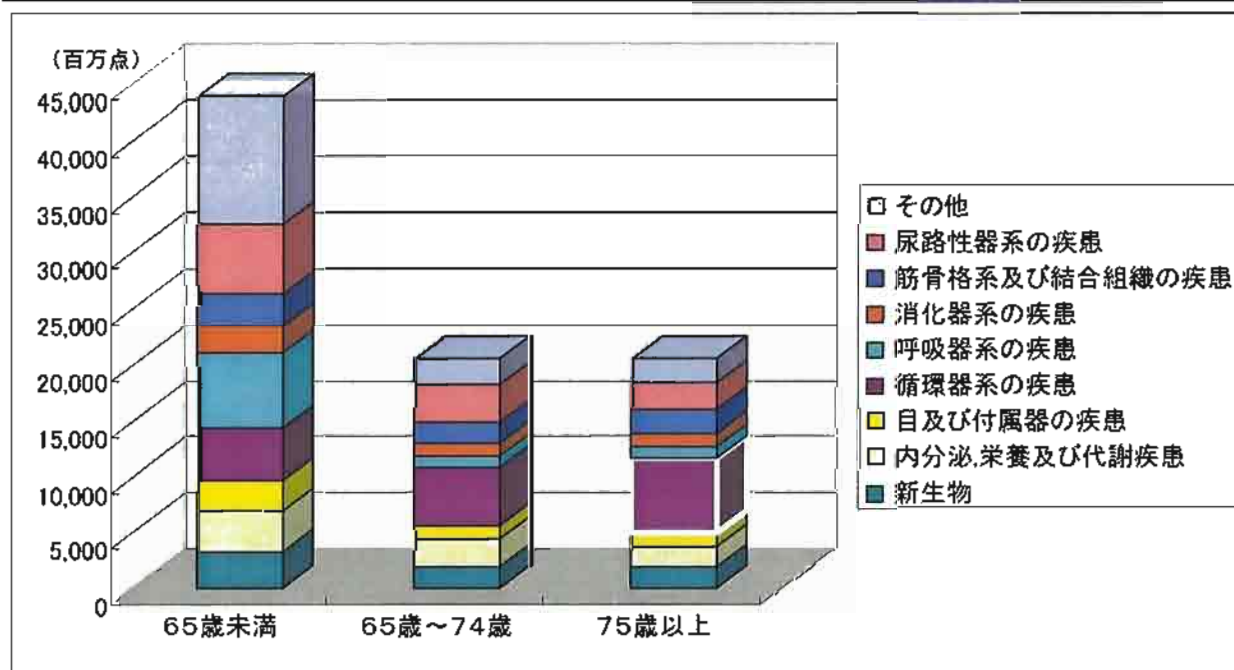
- ・入院における医療費では、新生物と循環器疾患の占める割合が大きい。
- ・新生物は65歳未満が多く、循環器疾患は75歳以上に多い。



19

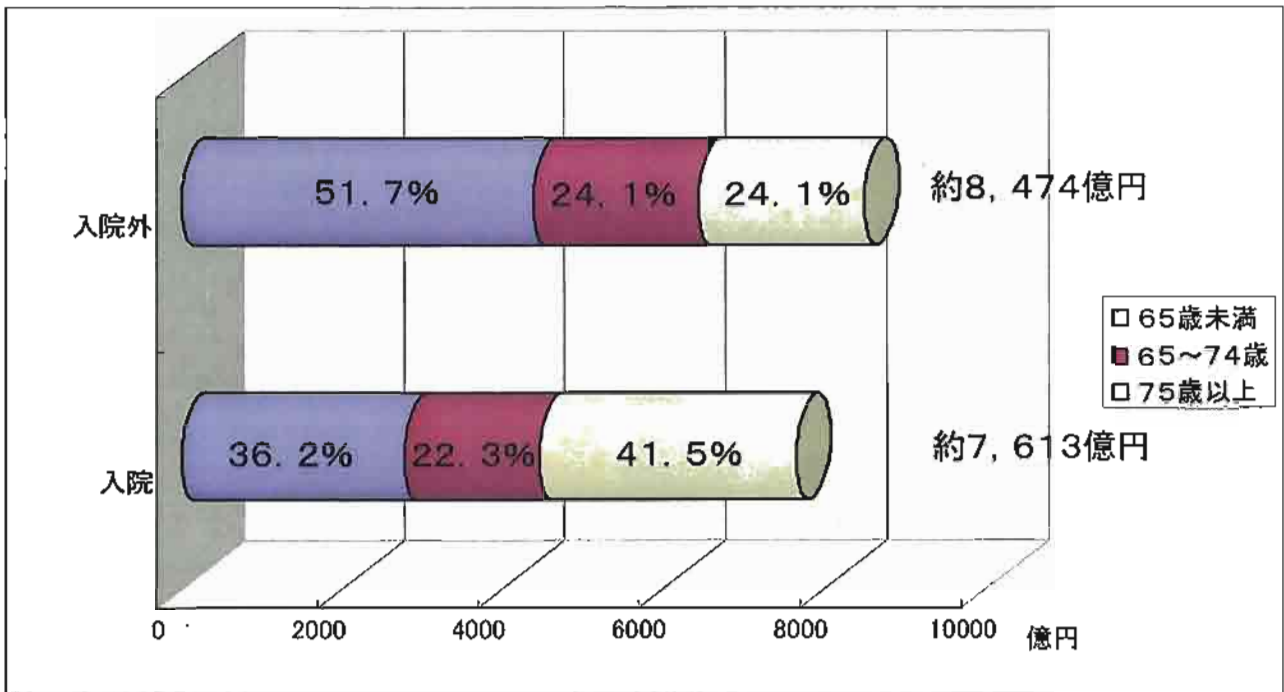
年齢階級別・疾患分類別にみた医療費（入院外）

- ・後期高齢者の入院外における医療費では循環器系疾患の占める割合が高い。



20

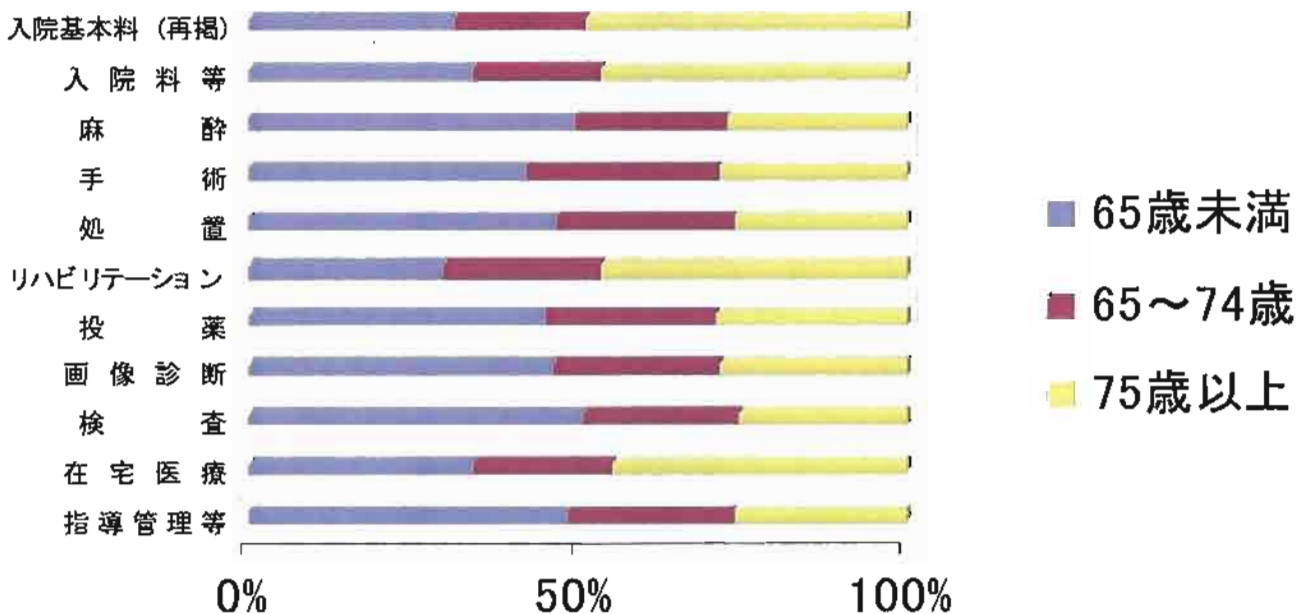
後期高齢者は入院における医療費の占める割合高く、65歳未満の患者は入院外における医療費の占める割合が高い



出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

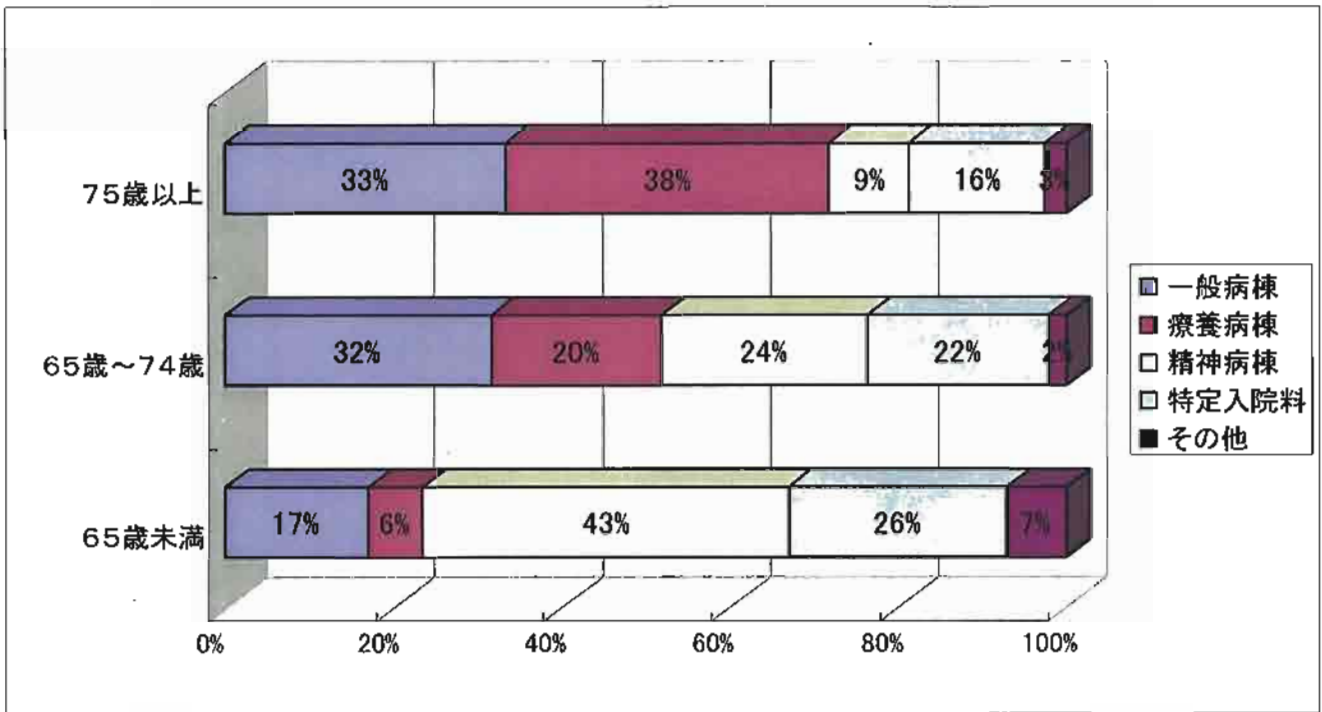
年齢階級別にみた診療行為別の診療報酬点数の割合

入院料、リハビリテーション、在宅医療においては、おおよそ50%を75歳以上が占めている。



出典)社会医療診療行為別調査(平成17年6月審査分)

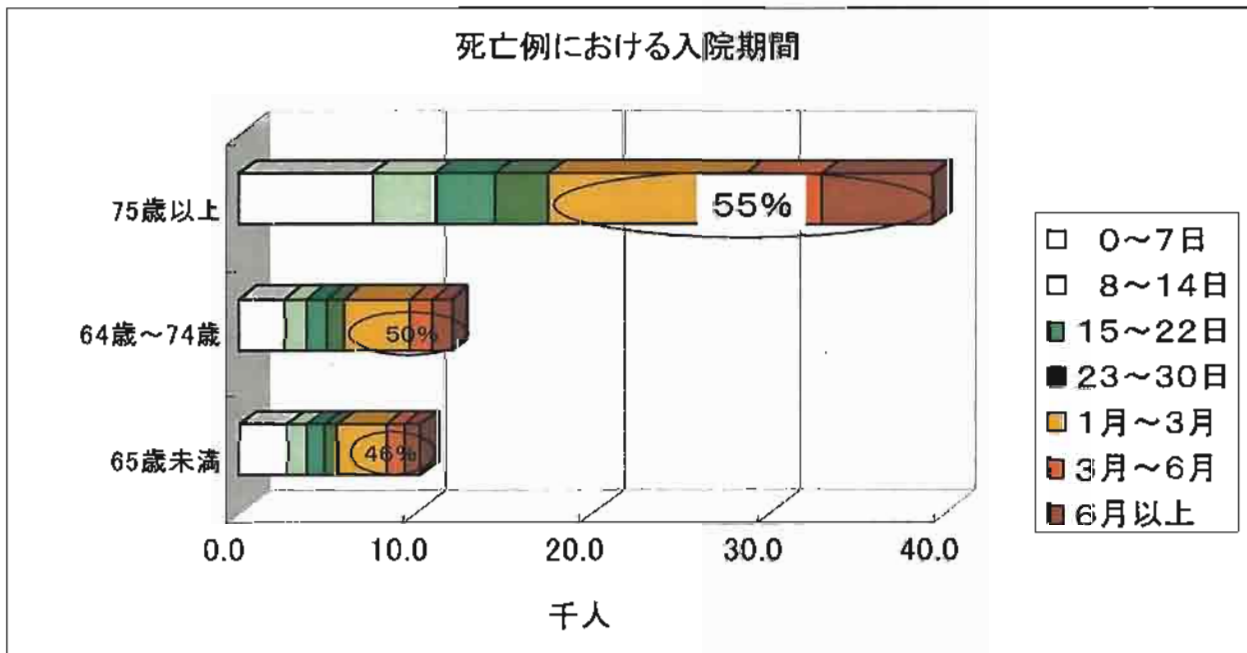
75歳以上では、約4割の患者は療養病棟に入院している。



出典:平成17年社会医療診療行為別調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

32

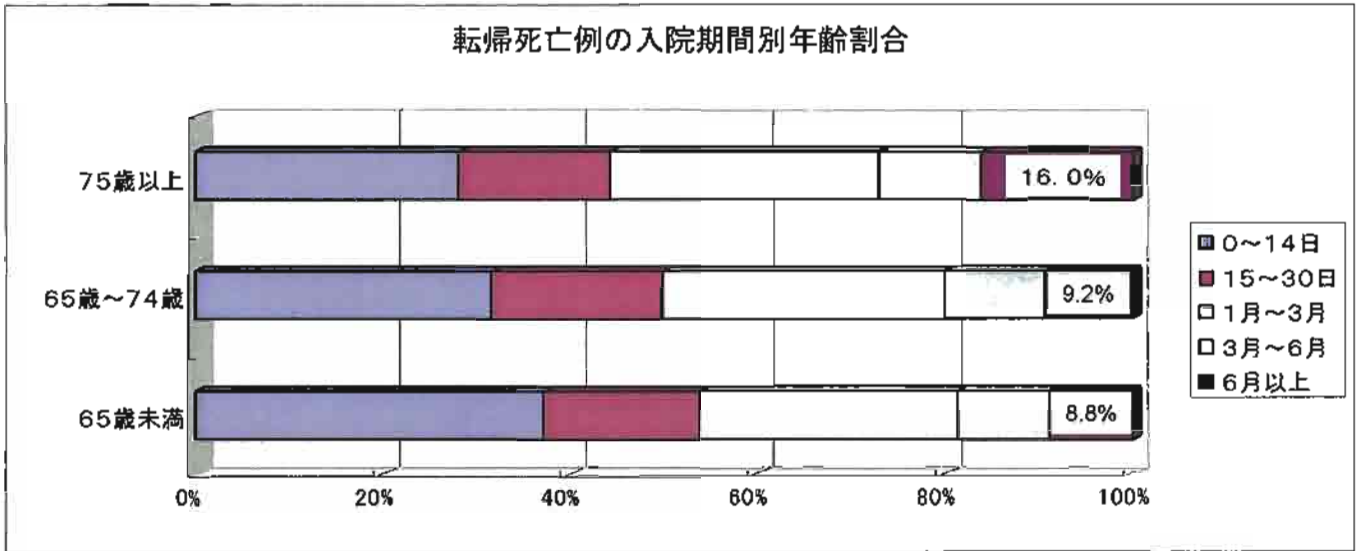
75歳以上の死亡例において、約半数(55%)は入院期間が1ヶ月を超えている。



出典)平成17年患者調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成

33

75歳以上の死亡例においては、長期間入院している例、特に6月以上入院している例が他の年齢階級に比べて多い。



出典:平成17年患者調査、特別集計をもとに保険局医療課で作成